

来待石石切場遺跡群

(KIMACHIISHI ISHIKIRIBA ISEKIGUN)

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1

1998年3月

島根県教育委員会
日本道路公団

来待石石切場遺跡群

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1

1998年3月

島根県教育委員会
日本道路公団



長道遺跡



三反田遺跡



小三才谷遺跡

序

中国横断自動車道尾道・松江線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち三刀屋～松江間につきましては、平成9年3月から鋭意建設を進めてまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について鳥根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である宍道町における長廻遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は鳥根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる誠意を表すものであります。

平成10年3月

日本道路公団中国支社松江工事事務所

所長 木光清治

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社から委託を受けて、中国横断自動車道尾道松江線（三刀屋～玉湯間）の建設工事に伴う文化財発掘調査を平成8年度から実施しています。

本報告書は、初年度に実施した調査予定地内の宍道町来待地区を中心とした石切場遺跡の調査結果をとりまとめたものです。

出雲の来待石は、古代より山陰でも有数の良質な石材として産出され、出雲石造文化を形造った重要な石材として、人々の生活に浸透したことは周知のことと、この石材を産出した根拠ともなる採石の形態を、記録に残すことは重要な意義をもつものと考えています。

本書が郷土の文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待いたしますと共に、埋蔵文化財の保護・啓発に対して今後とも格別のご理解をいただきますようお願いいたします。

おわりに、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、御指導御協力いただきました日本道路公団、宍道町教育委員会をはじめ関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

島根県教育委員会教育長

江口 博晴

例　　言

1. 本書は、日本道路公団広島建設局からの委託を受けて、島根県教育委員会が平成8年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線（二刀屋～玉湯間）の建設工事に伴う文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 平成8年度は、尾道松江線（玉湯～宍道間）のうち八束郡宍道町来待地内の下記9ヶ所の右切場遺跡の発掘調査を実施した。

イヤ谷遺跡（八束郡宍道町東来待）	大畠遺跡（八束郡宍道町東来待）
小三才谷遺跡（八束郡宍道町東来待）	川岡遺跡（八束郡宍道町東来待）
山屋遺跡（八束郡宍道町西来待）	勝負廻II遺跡（八束郡宍道町西来待）
長廻遺跡（八束郡宍道町西来待）	二反田遺跡（八束郡宍道町西来待）
ゴンワ遺跡（八束郡宍道町西来待）	

3. 調査組織は次のとおりである。

〔事務局〕	勝部 昭（文化財課長） 穴道正年（埋蔵文化財調査センター長）
	森山洋光（課長補佐、平成8年度） 島地徳郎（課長補佐） 古崎藏治（課長補佐）
	瀧谷昌宏（企画調整係主事）
〔調査員〕	川原和人（文化財課主幹・調査第二係長） 植田良司（同文化財保護主事）
	守岡利栄（同文化財主事） 沙魚川聰子（同臨時職員） 中岡宏樹（同臨時職員）
	上河淳浩（同臨時職員）

〔製図作業〕 津森真弓 渡部桂子

4. 発掘作業（発掘作業員雇用・重機借入・発掘用具調達など）については、日本道路公団広島建設局松江工事事務所・社団法人中国建設弘済会・島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団中国建設弘済会へ委託して実施した。空撮・測量は㈱アイシーに依頼し実施した。

社団中国建設弘済会島根支部

〔現場担当〕 布村幹夫（現場事務所長） 木村昌義（技術員）

〔事務担当〕 与賀明子

5. 報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表させていただく。（敬称略）

勝部正郊（文化財保護審議委員） 永井 泰（来待ストーン博物館長）

植田 信（宍道町教委総務係長） 勝部 博（来待石採石業）

6. 本報告書の作成は以下の者が行なった。

〔報告書の執筆〕 川原 植田

〔遺物の実測・製図〕 川原 植田 守岡

〔遺構の写真撮影・実測〕 ㈱アイシー

7. 出土遺物及び実測図、写真是島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

8. 参考文献として、宍道町教育委員会発行の『宍道町ふるさと文庫3・8』、宍道町発行の『宍道町誌』を参考にした。また掲載した写真の一部は宍道町教委から借用させていただいた。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 米待石の概要	2
1節 地質からみた石切場の分布	2
2節 米待石の採石と加工の歴史	3
3節 手掘りによる切り出し技法	5
4節 米待石の文化的用途	7
第3章 遺跡の概要	8
1節 三反田遺跡	9
2節 小三才谷遺跡	17
3節 勝負廻Ⅱ遺跡	23
4節 イヤ谷遺跡	29
5節 大畠遺跡	37
6節 長廻遺跡	43
7節 その他の石切場	50
第4章 まとめ	53

挿 図 目 次

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 第1図 尖道町の地質分布 | 第24図 西区奥壁実測図 (1/100) |
| 第2図 調査対象遺跡位置図 | 第25図 西区側壁実測図 (南側) (1/100) |
| 第3図 三反田遺跡第Ⅱ採石跡
出土遺物実測図 (1/2) | 第26図 西区側壁実測図 (北側) (1/100) |
| 第4図 三反田遺跡地形測量図 (1/500) | 第27図 西区 A 地点実測図 (1/100) |
| 第5図 第Ⅰ・第Ⅱ採石跡実測図 (1/300) | 第28図 西区 B 地点実測図 (1/100) |
| 第6図 第Ⅰ・第Ⅱ採石跡平面図 (1/300) | 第29図 大畑遺跡地形測量図 (1/600) |
| 第7図 第Ⅲ採石跡実測図 (1/100) | 第30図 第Ⅰ・第Ⅱ採石跡平面図 (1/200) |
| 第8図 第Ⅲ採石跡平面図 (1/150) | 第31図 第Ⅰ採石跡奥壁実測図 (1/100) |
| 第9図 小三才谷遺跡地形測量図 (1/600) | 第32図 第Ⅰ採石跡側壁実測図
(東側) (1/100) |
| 第10図 平面図 (1/300) | 第33図 第Ⅰ採石跡側壁実測図
(西側) (1/100) |
| 第11図 南壁実測図 (1/100) | 第34図 第Ⅱ採石跡側壁実測図
(南側) (1/100) |
| 第12図 東壁実測図 (1/100) | 第35図 第Ⅱ採石跡 A 地点実測図 (1/100) |
| 第13図 石垣実測図 (1/100) | 第36図 第Ⅱ採石跡奥壁実測図 (1/100) |
| 第14図 勝負廻Ⅱ遺跡地形測量図 (1/500) | 第37図 長廻遺跡地形測量図 (1/600) |
| 第15図 勝負廻Ⅱ遺跡出土遺物実測図 (1/3) | 第38図 平面図 (1/300) |
| 第16図 奥壁実測図 (1/100) | 第39図 奥壁実測図 (1/100) |
| 第17図 側壁実測図 (1/100) | 第40図 側壁実測図 (西側) (1/200) |
| 第18図 平面図 (1/150) | 第41図 側壁実測図 (東側) (1/200) |
| 第19図 イヤ谷遺跡出土遺物実測図 (1/3) | 第42図 長廻遺跡出土遺物実測図 (1/3) |
| 第20図 イヤ谷遺跡地形測量図 (1/500) | 第43図 川岡遺跡地形測量図 (1/800) |
| 第21図 東区奥壁実測図 (1/100) | 第44図 ゴンワ遺跡地形測量図 (1/800) |
| 第22図 東区平面図 (1/150) | |
| 第23図 西区平面図 (1/150) | |

写 真 目 次

- 卷頭カラー
- 長廻遺跡
- 三反田遺跡
- 小三才遺跡
- 現在の石切場（来待）
- 来待石製の石灯籠
- 吹き場の作業風景
- キリヌキ作業
- シアゲ作業
- イシワリ作業
- 寸法どり
- 肩落し
- 荒けずり
- ねこぐるま
- 木ぞり（木馬）
- 五輪塔と宝鏡印塔（岩屋寺）
- 石垣（石宮神社）
- 六角地蔵灯籠（円成寺）
- 民家の炬燼
- 写真1 三反田遺跡第Ⅱ採石跡出土遺物
- 写真2 三反田遺跡第Ⅰ採石跡
- 写真3 三反田遺跡全景
- 写真4 三反田遺跡第Ⅰ採石跡B地点
- 写真5 三反田遺跡第Ⅱ採石跡
- 写真6 三反田遺跡第Ⅲ採石跡遠景
- 写真7 三反田遺跡第Ⅲ採石跡近景
- 写真8 小三才谷遺跡全景
- 写真9 小三才谷遺跡近景
- 写真10 小三才谷遺跡工具痕
- 写真11 小三才谷遺跡石垣
- 写真12 勝負廻Ⅱ遺跡全景
- 写真13 勝負廻Ⅱ遺跡石垣
- 写真14 勝負廻Ⅱ遺跡側壁
- 写真15 勝負廻Ⅱ遺跡側壁工具痕
- 写真16 勝負廻Ⅱ遺跡奥壁
- 写真17 勝負廻Ⅱ遺跡出土遺物
- 写真18 イヤ谷遺跡出土遺物
- 写真19 イヤ谷遺跡東区全景
- 写真20 イヤ谷遺跡東区採石跡
- 写真21 イヤ谷遺跡西区採石跡
- 写真22 イヤ谷遺跡西区採石跡上方から
- 写真23 イヤ谷遺跡西区側壁（内側）
- 写真24 イヤ谷遺跡西区側壁（外側）
- 写真25 大烟遺跡第Ⅰ採石跡
- 写真26 大烟遺跡第Ⅰ採石跡側壁（東側）
- 写真27 大烟遺跡第Ⅰ採石跡床面
- 写真28 大烟遺跡第Ⅰ採石跡（西側）
- 写真29 大烟遺跡第Ⅱ採石跡
- 写真30 長廻遺跡側壁（西側）
- 写真31 長廻遺跡機械採石痕
- 写真32 長廻遺跡全景
- 写真33 長廻遺跡奥壁上方
- 写真34 長廻遺跡出土遺物
- 写真35 川岡遺跡
- 写真36 山岸遺跡
- 写真37 ゴンワ遺跡
- 写真38 工具の痕跡分類

第1章 調査に至る経過

中国横断自動車道尾道・松江線は、松江都市圏と山陽地方を結び、中国自動車道に接続して、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進するとともに、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に事業の計画がなされた。

この計画にともなう埋蔵文化財の調査については、平成4年1月に建設省道路局長から日本道路公团に対して松江・三刀屋間について調査開始の指示があり、その一環として同年4月17日付けで、島根県教育委員会に埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。しかし、調査体制が整わないため分布調査が実施できない状態が続いていたが、その間、平成4年11月には日本道路公团に対し施行命令がおり、平成5年9月には工事実施計画が認可された。このような状況をうけ県教委では、平成6年3月になって分布調査を実施し、全体の9割あまりを踏査した。

この調査結果をふまえ同年の6月と8月に道路公团と調査の打合せを行った。この打合せでは、今回の分布調査が500m幅を対象に踏査しているので、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや調査事業の円滑化を図るために、用地買収、立木伐採等環境整備の充実を要望した。残りの分布調査は平成7年4月に完了し、4月28日付けで公團へ回答した。

同年4月には日本道路公团、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、8月3日に第一回の連絡会を開催した。この会議では平成8年度から発掘調査に入ることを前提に用地買収や立木伐採、侵入路、排水処理等の調査環境整備について協議を行った。この問題については、その後二回連絡会を行って調整し、宍道町下倉～弘長寺間の4.6kmに存在する遺跡について平成8年度から3パーティを投入して調査を実施することが決定した。

これをうけて調査を円滑に進めるため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事等の調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根県支部に委託するため、日本道路公团、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書を平成8年3月26日に交わし、本格的に調査の準備に入ることになった。

これら協議と並行するかたちで、10月には調査対象地の再踏査を行い宍道町下倉～弘長寺間には石切場10ヶ所、集落跡、古墳10ヶ所の計20遺跡が存在していることが判明し、調査対象面積が50,150m²におよぶことが分かった。

平成8年度当初、用地買収や立木伐採等の諸条件整備が遅れていることが判明したため、調査は6月に入ってから実施することとなった。調査体制は県職員4人、教員3人、調査補助員3人の計10人で3つのパーティに分けて調査を行った。その内2パーティは試掘調査で遺跡の存在が明らかになつた大谷Ⅰ遺跡、野津原Ⅱ遺跡について本調査に着手し、残りの1パーティが他の遺跡の試掘調査及び石切場の調査を担当することとした。10月以降は、勝負廻Ⅰ遺跡が本調査が必要となつたため、4つのパーティに分けて調査を行つた。

今回報告する石切場は、風化しやすい性質を持つ米来石の採石場で、壁面は垂直に切り立ち、常に落盤の危険性を伴うため、調査は主に写真撮影、測量図の作成を行うこととし、作業員による発掘作業は行わなかった。

第2章 来待石の概要

1節 地質からみた石切場の分布

来待石は地質学上からみてみると、布志名層と呼ばれる疊層の下に広がる来待層の一部である。この来待層は、宍道湖南岸沿いの玉湯町布志名付近から斐川町学頭付近までの丘陵地と、出雲市栗原から湖陵町下畠付近までの出雲平野南部丘陵、他にも多伎町田儀から大田市朝山にかけて分布している。来待石は、この来待層の一部の通称で、次項に示した宍道町の地質図を見ても分かるように、凝灰質砂岩は、宍道町全体の北側の宍道湖沿いに、東は鏡地区から西は伊志見地区まで長さ約10km、幅約1km前後にわたって続いている。

町の南に分布している古第三紀の花崗岩層は、今から約5~6000万年前のもので、その上に1600万年前の地層がつもっている。これが日本海のでき始めた頃で、当時日本列島の陸地を形成していた南側の花崗岩地帯の上に、次々と頁岩や疊岩などの堆積物がたまっていた。その後、奥出雲山地の隆起や激しい火山活動によって、安山岩のマグマが流れ出し火山灰なども沖合いの海にふりかたまり、来待石の元になる来待層を形づくった。来待石の傾斜が北側に下がっているのはこの地層の重なりが中国山地の隆起と海岸部の侵食によって、北側を削っていったことによるものであろう。

来待石を構成する砂岩は、火山活動が活発となった1400万年前、安山岩質の溶岩や火山灰が風化し、再び海に堆積して固まつたもので、学名は粗粒凝灰質砂岩と呼ばれている。この石の特徴は、石英をほとんど含んでいないため加工しやすく、風化しやすい。また、切り出した時は暗青色で、雨露にさらすと来待石らしい灰褐色となる。堆積岩として、その中に化石を含んでいることでも知られ、宍道町の鏡地区で最初に発見されたカガミアヌス（ホタテ貝の一種）やパレオバラドキシアなど貴重な化石も含まれている。これら陸と海との境界に棲んでいた生物は、今は絶滅しているが、



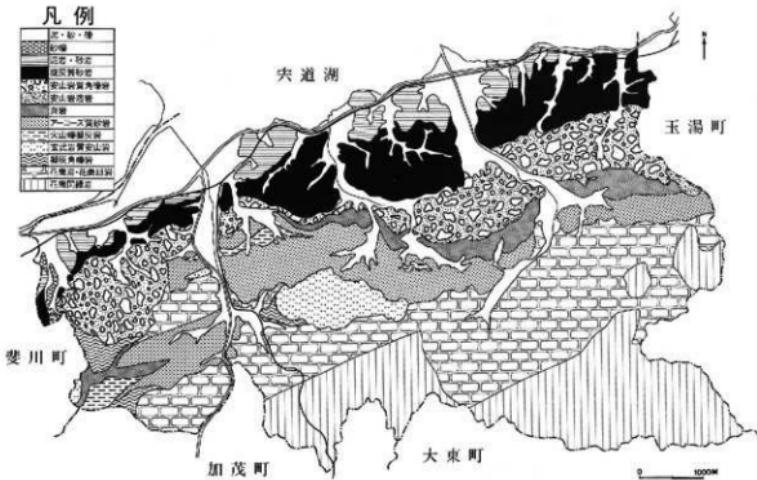
現在の石切場（来待）

1400万年前に生息していたこの海獣にとっては、一番最後の時代のものとなる。その他にも、サメの巨大儀やタコブネという貝の一種も化石として発見されている。このような化石を含む来待石は地質学上でも貴重なものといえよう。

来待石を含む来待層の分布は、同時に採石場となる石切場の所在と合致する。来待周辺の石切場では、現在、鏡地区が3ヶ所、東来待の弘長寺付近が5ヶ所、久戸地区が2~3ヶ所、内ヶ崎地区が1ヶ所で採掘をしている。今回調査した久戸地区や内ヶ崎地区的石切場のほとんどが、昭和でも戦前盛んに採掘されていた所であり、今はもう使われていないが、かなり広い範囲で採石が行われていたようだ。来待地区内でも、西部の白石付近よりも弘長寺・鏡地区を中心とした東部の町境に石切場が集中して多くなっている。これは、石質の違いによるものと思われる。

凡例

○	砂・泥・土
■	岩
△	砂岩
▲	泥岩
●	粘土質頁岩
◆	火山灰質頁岩
◆◆	火山灰質砂岩
△△	火成岩
△△△	火成岩質砂岩
◆◆◆	玄武岩質砂岩
◆◆◆◆	玄武岩
◆◆◆◆◆	花崗岩



第1図 宍道町の地質分布

2節 来待石の採石と加工の歴史

来待石の成因は、その岩質が凝灰質砂岩であることから、今から約1400万年前の新第三紀中新世の来待層という地層の中に含まれておらず、宍道湖の成り立ちと深い関係をもっていると言われている。この石が、いつごろから古代人の目に止まり、石材として使われるようになったかは不明であるが、少なくとも1400～1500年ぐらい前には利用されていたようである。

来待石の歴史をさかのばると、中でも「白粉石」と呼ばれる良質の石が使われるようになったのが5世紀の中ごろから後半である。来待川の中流域から発見された横田古墳の舟形石棺は、その代表例である。また、6世紀後半に造られた鏡北廻古墳は、その石室が来待石の加工によるもので、閉塞石の門状の浮き彫りは、当時の見事な加工技術の高さを物語っている。その他にも、伊賀見1号墳や下の空古墳の石棺式石室の石材としても来待石が使われている。宍道町に限らず、宍道湖周辺には来待石で造られた古墳がいくつもあり、利用の古さを今に伝えている。

中世から近世においても、来待石は貴重な石造物の石材として用いられている。来待石製の石造物は宍道町を始めとして、出雲全体に多くみられる。中でも、室町時代の終わりごろから信長・秀吉の時代にかけて、その利用が急増していることが分かっており、その多くは、五輪塔や宝篋印塔などの石塔が中心に残っている。また、石仏像として現在でも残っている、来待の磨崖千体地蔵もこのころ造られた山陰でも数少ない大規模な磨崖仏である。石見部の方々にも、来待石と同様に有名な福光石という石材があるが、来待石製のものは見つかっていない。南は広島県の北部から東は米子市にかけて、来待石が使われている例が分かっている。

江戸時代には、松江藩が「御止石」として国外にかけて持ち出すことを禁じ、石工職人も藩の

許可証を必要としていた。また、工具の中でも「丁能」は他者の使用を禁じており、「つるはし」を使って用に当てていた。

元来、来待地区産出の原石は、石材採掘業者「石きり」により専門的に切り出され、そのほとんどが主に加工業者「石屋」に買われて、そこで加工されていた。また、その職人は松江城下に移り住まねばならなかった。この時期、75名の石工を指名し、生産にあたらせていましたと伝えられている。来待石は排水施設や神社仏閣等の敷石通路、狛犬、民家の台所、屋根の棟石、墓石などに利用され、城下町松江が発展するとともに需要が拡大していったものと考えられる。

明治4年の廢藩置県後は、藩の禁制もとけ「採石」と「加工」が自由にできるようになった。明治の中期、当時唯一の交通便である舟便により、境港を経て県外移出が始まり境港・米子方面に加工業者が開業されるようにならった。中でも、境港は地の利もあって熱心にPRを行い、大正期に入った頃から、北陸、北海道、遠くは朝鮮の方まで販路を開拓していった。明治44年、来待の切石業者による来待石販売組合の設立によって地元の来待にもその技術が伝わった。その後、国を挙げての殖産興業政策の進む明治・大正の盛況期には、「切石業者」の数も増え、石材、石粉（瓦のゆう葉）の生産高は急増した。

大正末期になってから、技術の入手が若干早かった境港の業者が来待に来て、石材加工場を開業したため、加工職人の出入りもさかんになり、地区内で来待石を加工製品として出荷する「地元加工」の必要が叫ばれるようになった。昭和20年の終戦後まで、宍道・来待あわせて専業店4店と副業で4~5人の加工業者ができていたが、煉瓦・セメントが建築用材として使用され始め、用途としても、世情の落ちつきと共に、石材・石粉が減り灯篭・墓石類が需要の中心となった。

昭和28年に松江石材加工振興会が誕生し、宣伝販売に力が入れられた。その時よりややおくれて、地元にも加工業者の結成を奨められていたが、その機を見ず、その頃点在していた職人や、その希望者を吸収的に雇い入れ営業化し、松江市の優秀な職人を長期雇用して、益々技術の向上をはかる等で、一大飛躍をすることができた。昭和31年4月に来待石加工組合が5業者によって結成された。このころから、船舶輸送は鉄道に移管し、鉄道又は自動車による搬出にかわった。用途として河川改修用の石材不足のため来待石が大量に用いられるようになり、生産が追いつかなくなつたので火薬爆破で運び出す時期もあったが、建材としての需用が減りつつも来待石製品、特に石灯籠の生産は急激なのびをみせた。同時に量産体制をとるため、従来の手作業から採石、加工用具の機械化が求められるようになった。現在は、伝統工芸品として石灯籠等の製品を主に加工している業者が、宍道町を中心に営業している。



来待石製の石灯籠

3 節 手堀りによる切り出し技法

- ①【準備】採石業者は石山代金などの諸条件について所有者と交渉し、所有者から請け負うかたちで石を切り出す。最初に、山に入る時には山の神を祀り、祈願祭を行ってから仕事に入る。
- ②【吹き場の仕事】吹き場は採石場の近くに建てられた小さな鍛冶場で、採石道具の刃先の手入れをする所である。吹き場の中には、フイゴ炉、カナトコ、カナヅチ、水溜、ヒバシなどが備えられており、一人で作業できるよう効率的に配置されている。
- ③【キリヌキ作業】原石山から効率よく石を切り離すための作業。壁ぎわをほる「シリツケ」や隅の部分を掘る「イキズメ」という技法で石に切り込みをする。道具は、マサカリ・キリヌキマサカリ・キリヌキグワを使う。
- ④【イシアゲ】石山にくついた石の底をあげて切りはなす作業。石の下部に高さ約10cmの溝を堀る。これをアゲ切りという。溝に約20cm間隔で小さな穴を掘るのが、ヤイド掘り。「マサカリ」と「オオヤ」を使い、ゲンノウで打ち込み溝に沿って切り離す。
- ⑤【イシリワリ】適当な大きさに、用途に応じて石を割る作業。「オオワリ」・「トチュウアゲ」・「コワリ」など割り方によって名称が異なる。用具として、マサカリ・オオヤ・チュウヤ・ナガヤ・コヤ・ゲンノウ・カナテコを使う。石を横または、縦方向に割るのが「オオワリ」、注文の石の寸法によって2つに割ったり、3つに割ったりする。それをさらに上下に割るのを「トチュウアゲ」、製品の用途に合わせて半加工しやすいように割る作業を「コワリ」という。いずれも、割りたい所にマサカリでスジ引きをし、等間隔のヤイド(穴)を掘り「ヤ」の大小を使い分け、ゲンノウで打ち割る。



吹き場の作業風景



キリヌキ作業



イシアゲ作業



イシリワリ作業

⑥【キリイシ】イシワリで小さくした石を採石場の脇で半加工する作業。寸法に合わせて荒ヶズリをする。この作業をするのは、余分な部分を削り落して運搬しやすくするのと、加工場に運ぶ前に、できるだけ加工し易くしておくためである。寸法どり・肩落し・荒げずりの3段階の作業工程がある。用具としては、じょうぎ・さしがね・すじひき・ゲンノウ・きりま・マサカリ・つるはし・チョウノウ等を使う。下の3枚の写真は、昭和40年代の「キリイシ」作業風景を写したものである。



寸法どり



肩落し



荒げずり

⑦【原石運搬】昭和40年代ごろまでは、ねこぐるま・オイコ・木ぞり・大八車などを使って原石を運んでいた。今は、道路が整備されており自動車が使えるが、当時は採石場から加工場までは、尾根あり谷ありの急斜面で大変な重労働だったと思われる。ねこぐるまは、採石場で「イシワリ」によって小さくした原石を、採石場の脇にある作業場まで運ぶために使用した。木ぞりは木馬(きんま)とも呼ばれ、半加工製品を谷下の車道までの細い急斜面を運ぶのに使用した。その構造は、木材を簡単に組み合わせたもので、その前方には鉄製のブレーキがついており、雪道や地面がぬれている時に使用し、乾くとはずした。オイコも同じような目的で、女性が肩に背負って使った。大八車は、平坦な道の輸送に使われたものと思う。



ねこぐるま



木ぞり（木馬）

4 節 来待石の文化的用途

来待石は、加工が容易であると同時に、耐火性が強く、青苔がつきやすいという利点もあり、古くから石材として広く利用されてきた。5～6世紀ごろに築造された古墳の石室に、この来待石が使われた例が最も多く、中世になって宝篋印塔などの石塔に使用された。しかし、来待石の風化しやすいという性質のために、多くの作品が石塵と帰してしまったようだ。需要が拡大するのは江戸時代になってからである。

明治大正期には、採石が容易で値段も安く耐火性があることから、墓石以外に建築・土木用材として用いられた。家屋の棟石・瓦・炬燵や台所・竈の石材としても重宝された。大正末期から昭和初期になって、セメント・煉瓦などの建築用材が普及するようになると、石材としての需用は減り灯籠・墓石が需用の中心となった。

昭和30年代になると、用途として河川改修用の石材不足のため、来待石がその用材となる時期もあったが、採石・加工技術の機械化に伴う進歩によって、石灯籠など工芸品の生産が急激に伸び、現在のような伝統工芸品を生み出した。ここでは、近世から現代に造られた来待石製の石造物を中心に掲載する。



五輪塔と宝篋印塔（岩屋寺）



六角地藏灯籠（円成寺）



石塚（石宮神社）



民家の炬燵

第3章 調査の概要

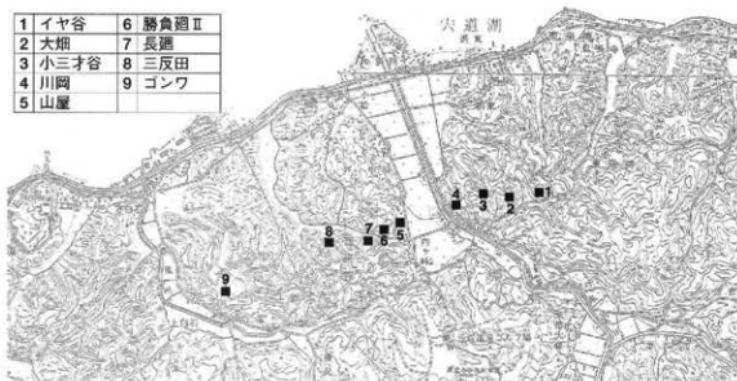
中国横断自動車道建設予定地内に所在している石切場の調査は当初10ヶ所を予定していたが、伊料免遺跡は立木伐採後、現地踏査した結果、予定地内に採石跡が存在していないことが判明したため9ヶ所を対象に行った。これらの石切場は来待川を挟んで東西に広がっている比較的低い丘陵地に営まれており、二つに分布が分かれる。東来待にある4ヶ所はいずれも規模が大きく、現在も二ヶ所で採石を行っている良質な米来石の産出するところである。西来待の石切場は長廻、ゴンワ遺跡のように大規模のものと小規模な三反田、勝負廻Ⅱ、山屋遺跡に分けられる。

山屋遺跡の調査は昭和30年代以降、来待石が河川改修の護岸工事用に用いられるようになって岩盤に穴を開け黒色火薬で爆破して採石した跡であることが分かったため写真撮影だけを行った。また、落盤の危険性がある三反田、勝負廻Ⅱ遺跡以外の遺跡については重機で床面に散乱している岩石等を取り除き、重機が入らないゴンワ、川岡、イヤ谷東遺跡の調査は現状の写真撮影及び部分的な実測図作成に留めた。詳細な図面作成は、三反田、長廻、勝負廻Ⅱ、小三才谷、大畑、イヤ谷の6遺跡について行った。

今回調査対象となった石切場は、作業員の安全を確保するため十分な調査を行うことができなかつたが、採石方法が戦後の新しいものも入れて大きく4つあることが分かるとともに、技法や採石跡に生えていた杉の年輪等から古いものは江戸～明治時代まで遡ることが明らかになった。採石方法としては、石の節理面を利用して縦方向に削って採石したもの、マサカリを使用したキリヌキ技法と呼ばれるもの、昭和30年代から導入された黒色火薬による発破や採石機によるもの等があり、キリヌキ技法は溝が一方向のものと二方向のものに分けられる。二方向のものは規格的に石を方形に切り出しているもので、大正年間に出現した技法である。

遺物としては、長廻、イヤ谷遺跡からナガヤ、コヤと呼ばれるイシアゲや石割りに用いる矢が3点、勝負廻Ⅱ遺跡から鉄製の鋸先1、鎌1、セルロイド製の横クシ1を検出した。また、三反田遺跡から不明鉄器1点が出土している。

1	イヤ谷	6	勝負廻Ⅱ
2	大畑	7	長廻
3	小三才谷	8	三反田
4	川岡	9	ゴンワ
5	山屋		



第2図 調査対象遺跡位置図

1 節 三反田遺跡

この遺跡は穴道町大字西来待2244番地外に所在する小規模な採石場である。ここは、来待川と同道川に挟まれた低丘陵地帯に位置し、南北に伸びる狭長な谷の東斜面に営まれたもので、7ヶ所あまりの採石跡からなりりたっている。この遺跡から小さな谷を挟んだ東側には大規模な石切場である長廻遺跡が存在する。

採石跡は谷の東側斜面に2ヶ所、谷頭に1ヶ所、西側斜面に2ヶ所、東側尾根上に2ヶ所の計7ヶ所存在している。東側斜面の第Ⅰ採石跡は長さ30m、幅10mあまりで比較的大きいが、その外は、長さ10m内外の小規模なもので、北側斜面の谷入り口付近に存在する第Ⅳ採石跡は大部分が道路建設予定地外であった。

調査は規模の大きい第Ⅰ採石跡の他、採石の形状を良く残している東側斜面の第Ⅱ採石跡、西側斜面の第Ⅲ採石跡の3ヶ所を対象に行った。なお、第Ⅰ採石は床面が既に露出していたため壁面に付着している苔等の除去及び壁面上方の草木の清掃を行い、1/20の平面図、側面図の作成と写真撮影を行った。第Ⅱ採石跡は壁面の高さが2mあまりと低く、比較的安全であったので床面に休積していた岩塊、土砂等を人力で取り除き、また、第Ⅲ採石跡は低い壁面であったが、床面の上砂が厚く休積していたため発掘作業を途中で断念し、それぞれ実測図作成、写真撮影を行った。

この採石場については言い伝えが残っていないなく採石時期等については不明であるが第Ⅰ採石場の採石方法は他の石切場でも見られないことや、壁面に文字らしい刻み目があり注目された。第Ⅱ・Ⅲ採石跡については、キリヌキ、イシアゲの技法が一部残っているため比較的新しいものであることが分かった。なお、第Ⅱ採石跡から不明鉄器1点が出土した。

第Ⅰ採石跡

谷の東斜面下方に存在している長さ30m、奥行き10m～5mの採石跡で、平面形は鍵形を呈したジグザグの形状をなしている。この採石跡は、節理面を利用して上方から矢を入れて岩塊を割り出しており、4ヶ所で石を採石している。これらの採石跡は南北方向と東西方向に伸びている自然の節理面に直接矢を入れて採石しているA、C地点と東西方向のみ節理面を利用し、南北方向はノミ状の道具で溝をほり、矢を入れるためのヤイド掘りをして矢で岩を切り離しているB、D地点の二つに分けられる。

二方向の節理面を利用しているA地点は、谷の入り口に近くの最も下方にあり、南北方向6m、東西方向4m、高さ2m～3mを計る。東西方向の壁面の上方にある自然傾斜面には三本の節理線が走っており、その内の一本には矢を入れるためのヤイド掘りの痕跡が残っている。第Ⅰ採石跡のほぼ中央に位置するC地点は、南北方向約7m、東西方向約4m、最も高いところで3mを計る。A、C地点の床面はほぼ平らであるが前方に向かって傾斜して下がっている。

B地点は、A地点の上方にあり、南北方向約6m、東西方向約4m、高さ5mを計り、床面はV字形を呈している。東西方向の壁面上方には、三列に矢の痕跡が残っている。矢の痕跡は10cm～20cm間隔で、一辺4cm前後の方形を呈し、上列で4、中列で7、下列で10あまりが残っていた。矢跡の上方には溝を掘った痕跡が残り、矢跡列の上下の間隔は80cmあまりを計る。溝の痕跡は、幅が1cm以内の細かい刻み線が左下がり方向に「ノ」の字形に伸びるところと、「く」の字形に残っているところがある。これら3回の溝の痕跡は、岩を採石する際、思いどおり岩が削れなかつたため何回

も溝掘りを行ったものと思われる。

第Ⅰ採石跡の最も谷が頭方向にあるD地点は、B地点と同じ方法で採石しており、南北方向5m、東西方向1.5m、高さ2mを計る。D地点とC地点との間にある自然傾斜面の岩肌には「太」とも「左」とも読めそうな線刻の文字らしい痕跡が刻まれていた。これは文字であるとは断定できなかったが、地元の石工の話では、石の所有権を主張するため石工が岩のかたまりに名前を刻んでいたことが昔にはあったというから、今後検討が必要なものと思われる。

このように第Ⅰ採石跡では、二つの方法によって石を採石していたが、自然の節理面だけを利用した方法では、上方が尖る断面三角形の岩塊を切り出し、一方に溝を掘っているものは、下方が尖る断面三角形の岩塊を切り出しており、岩塊の節理の状況に応じて採石方法を異にしていたものと思われる。このような採石方法は今回調査した石切場では他に例がなく、採石方法としては古いようと思われるが、時代のきめてとなるような遺物等は検出できなかった。

第Ⅱ採石跡

第Ⅰ採石跡より谷頭に向かった上方に位置している採石跡で、奥行き2.2m、幅2.1m、高さの2.0mを計る小規模なもので、平面形は「コ」の字形を呈する。谷頭方向の側壁には「T」字形に幅約5cmのキリヌキ溝が残存している。奥壁上面には30cm～70cmの幅に、上下約20cmの間隔の羽状文風のマサカリの痕跡があり、その下方に10あまりの矢の痕が残っている。マサカリの痕跡は第Ⅰ採石跡のB地点奥壁に残るものと比べやや線が太く鮮明である。また、床面は平らであるが、前方に向かってやや傾斜して下がっている。

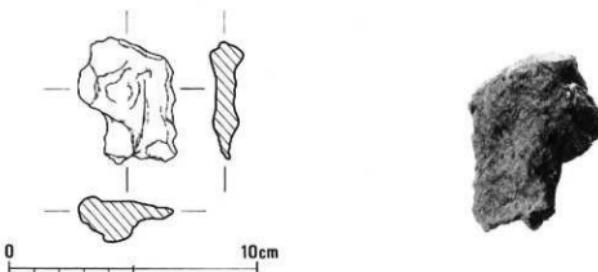
この採石跡は、奥行き方向は自然の節理面を利用し、奥壁はキリヌキ技法によって溝を掘り、そこに矢を入れて石を切り離している。その後、谷頭方向の側壁上方にキリヌキを入れて採石しようとしたが、何らかの理由で中断したものと思われる。なお、床面から5cm×4cm、厚み0.9～1.7cmを計る鉄製の塊が出土したが、その用途、性格は不明である。

第Ⅲ採石跡

谷の西側斜面に位置している採石跡で、「L」字形の平面形を呈する。奥行き8m、奥壁幅3.9m、高さ2.8mを計る。床面は完掘できなかったが、前方に向かって傾斜していた。この採石跡は、奥行壁及び奥壁にキリヌキ溝や矢の痕跡は残っていないが、平面の形や壁がほぼ垂直であることなどからここで採石していたものと考えられる。その後、奥壁にイシアゲの溝を入れ、石を横方向に切り離して採取しようとしているが、途中で断念したようである。溝は奥の尖った三角形の断面を持つもので、幅は入り口で20cm～30cmあまりを計り、奥には15cm～20cm間隔で一辺5cm～8cmあまりのヤイド掘りと呼ばれる矢を打つための穴が残っている。溝を掘るために使用された道具の痕跡は、第Ⅱ採石跡のものより太い「ノ」の字形を呈していて粗く雑である。この溝は、最初に下方に入れて石を採取しようとしたが、うまくいかなかったため新たに上方に溝を掘ったものと思われる。

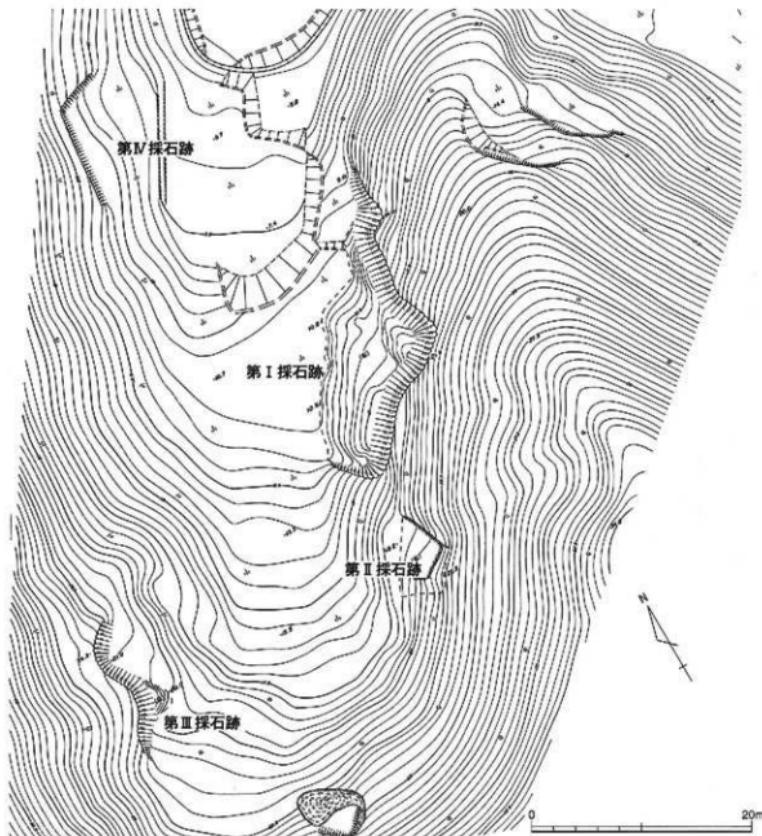
その他の採石跡

今回の調査では三ヶ所の採石跡を対象に行ったが、三反田の採石場には、その他、第Ⅲ採石跡の上方と下方にそれぞれ一ヶ所、第Ⅰ採石跡上方の尾根上に二ヶ所、奥壁幅3m～11m、側壁幅3m～5mあまりを計る小規模な採石跡が存在している。これらの採石跡は調査対象地のものとほぼ同じ採石方法で石を採取しているものと思われる。

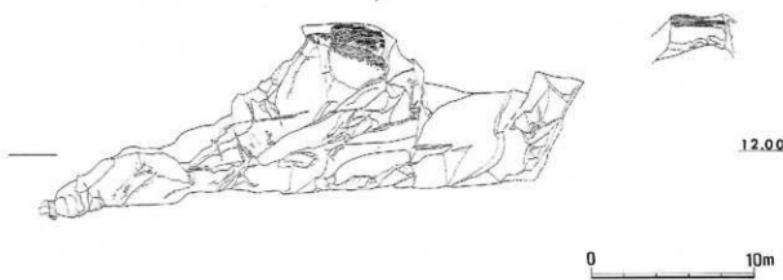


第3図 三反田遺跡第Ⅲ 採石跡出土遺物実測図 ($S=1/2$)

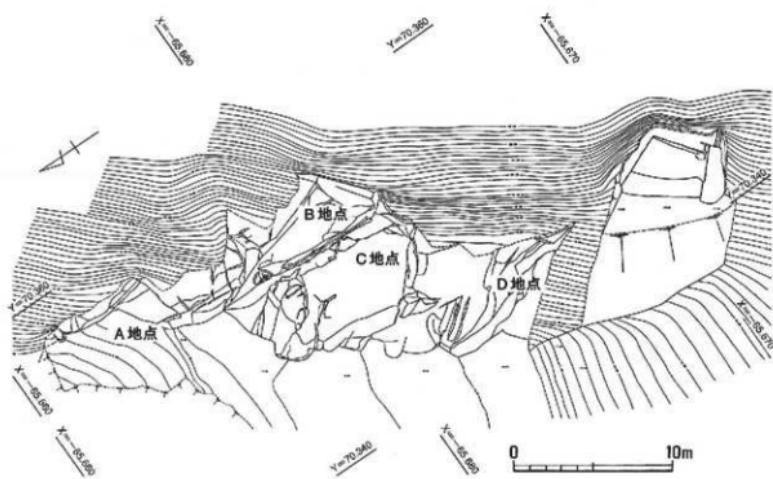
写真1 三反田遺跡第Ⅲ 採石跡出土遺物



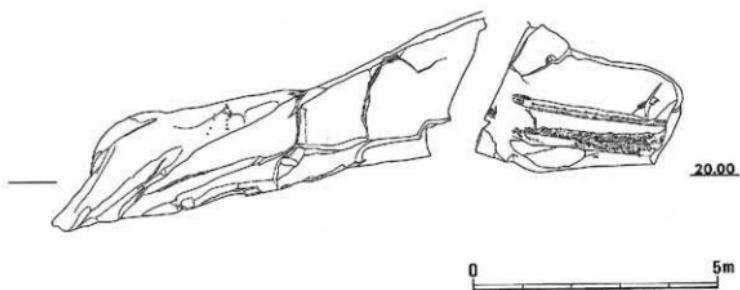
第4図 三反田遺跡地形測量図 ($S=1/500$)



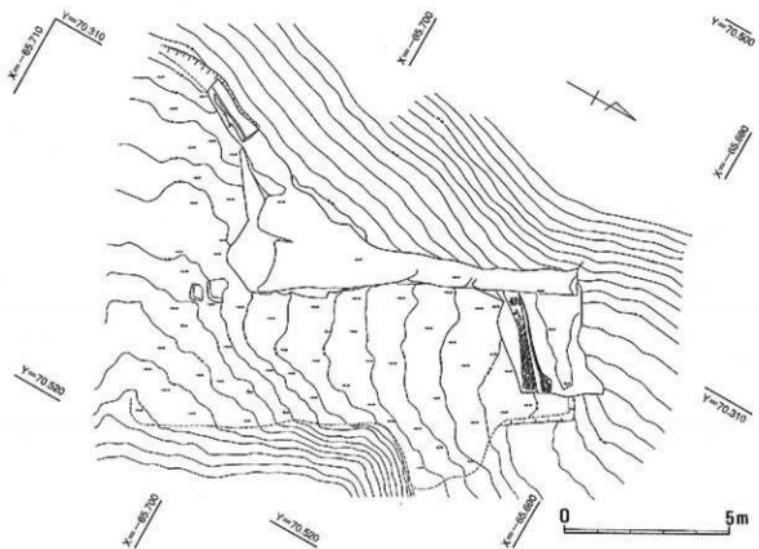
第5図 第I・第II採石跡実測図 (S=1/300)



第6図 第I・第II採石跡平面図 (S=1/300)



第7図 第Ⅲ採石跡実測図 ($S=1/100$)



第8図 第Ⅲ採石跡平面図 ($S=1/150$)



写真2 三反田遺跡第I採石跡



写真3 三反田遺跡全景



写真4 三反田遺跡第I 採石跡B地点



写真5 三反田遺跡第II 採石跡



写真6 三反田遺跡第Ⅲ探石跡遠景



写真7 三反田遺跡第Ⅲ探近景

2 節 小三才谷遺跡

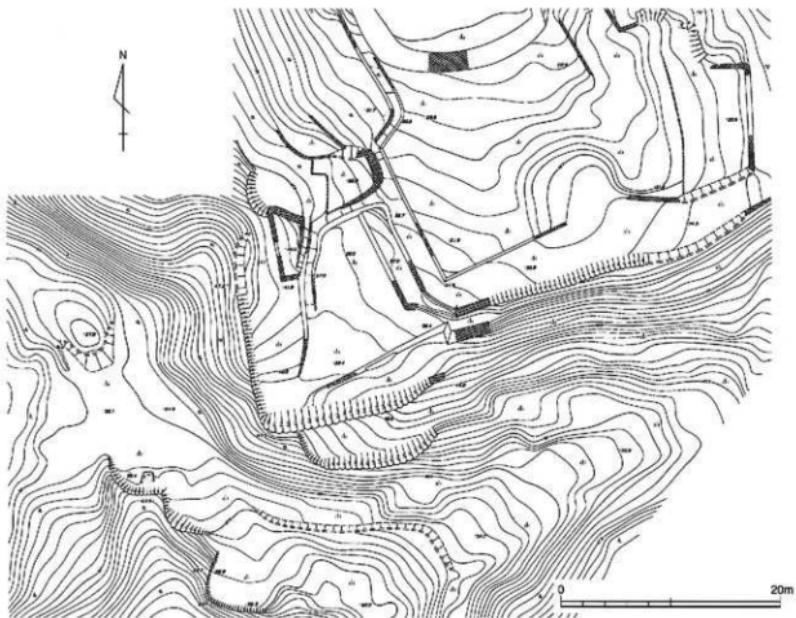
小三才谷の石切場は穴道町大字東来待1603番地他に所在する。ここは、米待川の東側広がっている低丘陵の一角に位置し、ストーンミュージアムの資料館がある谷の谷頭にある。ここには三段にわたって4ヶ所あまりの採石跡があるが、上方の二段のものは小規模であるので、調査は最下段の採石跡を対象とした。調査地は上方斜面に人頭大の石が散乱しており落石の危険性が極めて高く、壁付近に重機、作業員を近寄らせることが出来なかつたので、調査は現状の実測図作成及び写真撮影に留めた。

この採石跡は南北10m、東西9m、高さ5mあまりの「L」字形の平面形を呈した壁面を持つもので、壁の前方には四段にわたって石垣が廻っている。南北壁は道具の痕跡が存在していないが、ほぼ垂直な二本の節理線と北に向かって下がっている横方向の節理線が二本走っている。東西壁には西側の奥まったところと東側上方の一部に幅の狭い細長いノミ痕が残っている。このノミ痕は、マサカリでキリヌキ溝を掘った時につく痕跡とはあきらかに異なるもので、壁面全体に痕跡が残っていないことやシアゲ時の横線が見当らないことからキリヌキ溝が全面に存在していなかつたものと思われる。また、この採石跡は二つの壁面に縦方向と横方向に適当な間隔で節理線が走っているので、節理面を巧みに利用して採石したものと考えられ、一部、節理面にそって削れなかつた部分に溝をいた結果ノミ痕が部分的に残つたものと推測される。

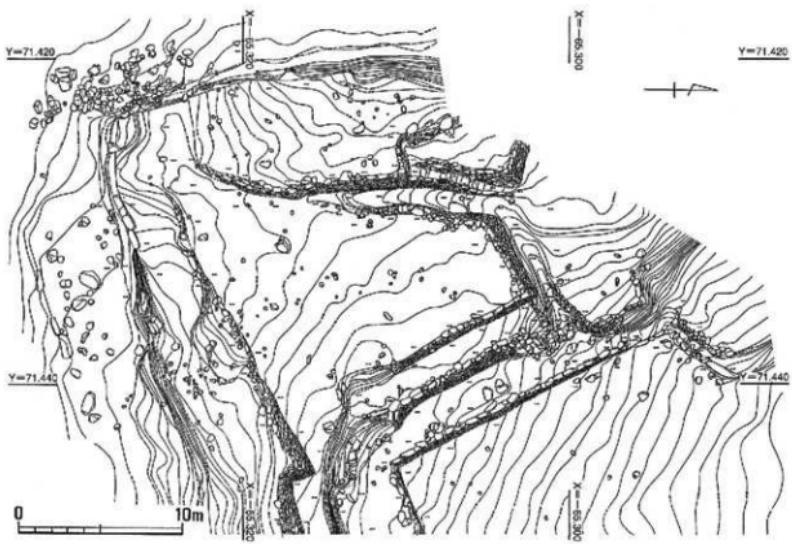
採石跡の前面には、石垣によって形成された四段の平坦面と谷から続く道が存在している。最上段の石垣は採石跡の二つの壁に沿って「ハ」の字形に伸び、東側のものは端から20mのところで1.5mあまり短く屈折して再び伸び、西側の石垣は端から13mのところで、石垣の上方のみ西側に2.5m屈折している。この部分には谷の上の採石跡につながる道が通つてゐる。また、西側石垣の谷よりの半分については、二段目の石垣を挟んで、その間が道となつてゐる。最上段は、幅3m~7mあまりを計るが、上面はL字形の壁面のコーナに向かって傾斜している。上から二段目の平坦地は「コ」の字形に石垣が廻つてゐるもので、作業場と考えられるところである。ここは、16m×5m~10mを計る台形を呈し、北側の石垣の下には道が通つてゐる。この段の下には二列の石垣が築かれ、1.5m~2mの狭い平坦面がある。これらの石垣は、高さ1.5m~3.0mを計るもので、石は一辺が20cm~40cm大の方形を呈した持えの短い割石を用いて布積み風に積み上げている。積み方はやや雜で、重箱状に縦積みされたところが多くみられ、一部崩壊しているところがある。また、最下段と最上段の平坦面は通路として使用されていたものと思われ、特に最上段の通路は上方で採石された石を運び出すものと考えられる。さらに、下から二段目の石垣は、三段目の高さまで石垣が積めなかつたため二段に分けて積まれた可能性がある。

小三才谷のように壁の前面に広いスペースを持ち何段にもわたつて石垣が廻つてゐるような採石跡は小三才谷の西側に存在している川岡で見られる。現存している壁面に対し、石垣によって形成された平坦地が広いのは、石を採石するたびに壁面が後方に引き、採石後の石削作業を容易なものとするため、前面に出来たスペースに石垣を積んで平坦地を造成したものと考えられる。

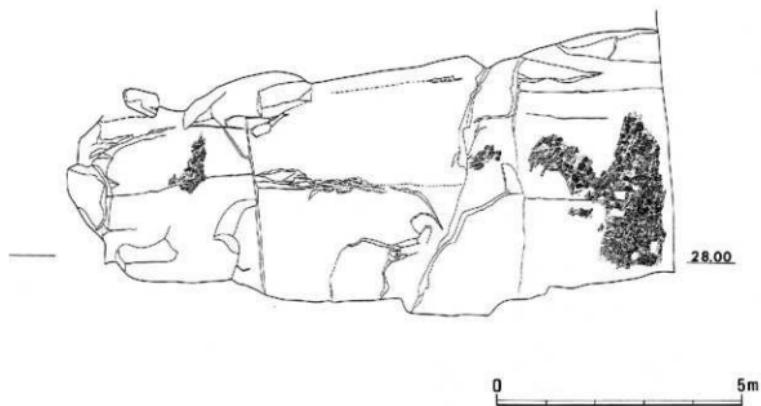
小三才谷の採石場は、最近まで行われていたキリヌキ技法と異なる方法で採石していることからやや古い時期のものと考えられ、石垣上の平坦地に生えていた杉の年輪等から100年以前のものと思われる。



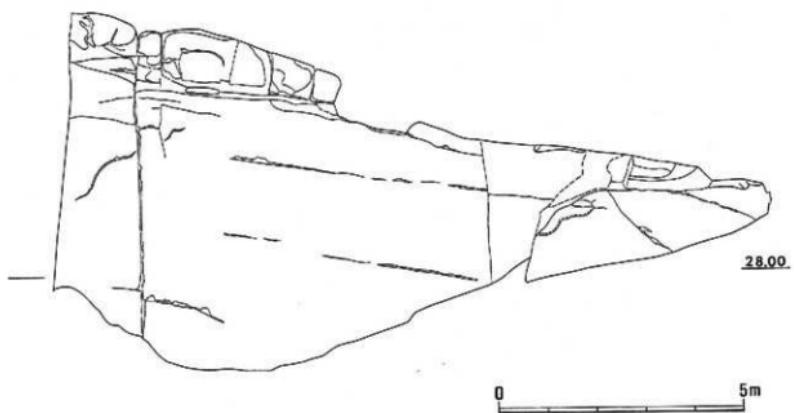
第9図 小三才谷遺跡地形測量図 (S=1/600)



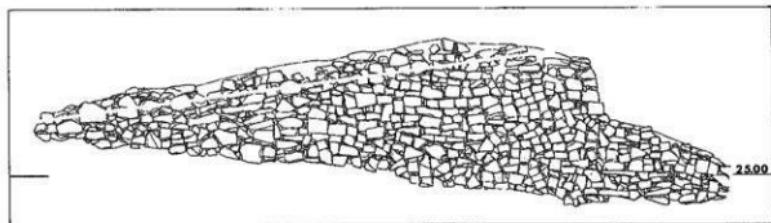
第10図 平面図 (S=1/300)



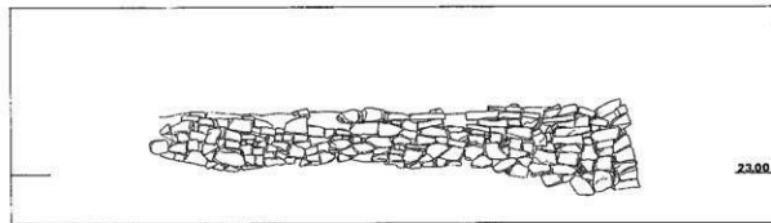
第11図 南壁実測図 (S=1/100)



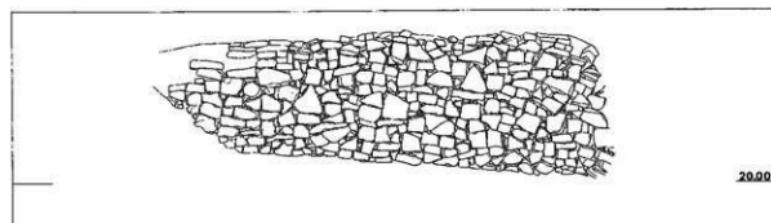
第12図 東壁実測図 (S=1/100)



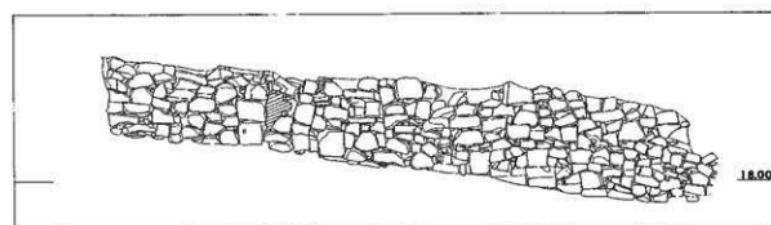
4段目



3段目



2段目



1段目

0 5m

第13図 石垣実測図 (S=1/100)



写真8 小三才谷遺跡全景



写真9 小三才谷遺跡近景



写真10 小三才谷遺跡工具痕



写真11 小三才谷遺跡石垣

3 節 勝負廻Ⅱ遺跡

穴道町西来待1097番地他に所在する石切場である。ここは、来待川西側に広がる低丘陵の一角にあたり、小さな谷の西側斜面に築かれている。谷の入り口には民家が存在し、東側の丘陵上には中世の城跡である勝負廻Ⅰ遺跡がある。

この採石跡は奥行約7m、奥壁幅約11m、高さ約4mを計る小規模なもので、平面形は「L」字形を呈し、前面には石垣を伴う平坦面がある。奥壁には、キリヌキ溝の作業中に残った痕跡が残っている。この痕跡は奥行方向のキリヌキ溝を掘る際に、溝の端である奥壁にマサカリの先端が壁に当たり点状の跡がついたもので、奥壁の南側に15cm~20cm幅の縦溝が四本残存していた。縦の間隔は0.9m~1.6mを計り、最も南よりの痕跡線は、キリヌキ技法で採石した後に、さらに、この部分で石を採石しているため上方の一部しか残っていない。これらの痕跡線は、ほとんどが奥壁の2/3の高さから下方に向かって伸びているが、最も北よりの痕跡線は他のものより下方に施している。また、側壁から1m北側よりの奥壁には幅5cmあまりの縦溝が掘られている。この溝の底には、一辺4cmあまりの矢を入れるためのヤイド掘りの穴が15cm~20cm間隔に穿たれている。これは、イシアゲを行なう際に、奥壁部の面が段差を持って割れ、残った盛り上がりの岩を取り除くために縦溝を掘って矢を入れたものと考えられる。なお、奥壁には北に向かって下がっている筋理線が4本存在し、マサカリの痕跡が残っていない北側部分は石の質が悪い。

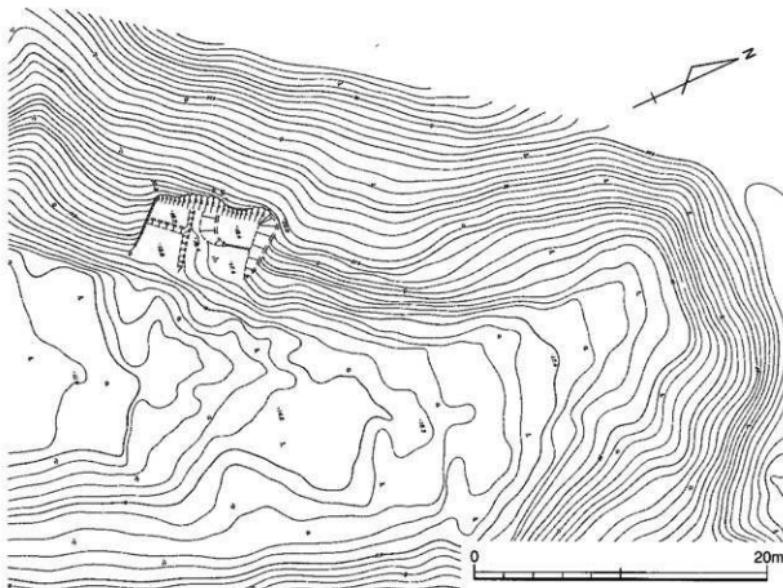
側壁は奥壁の南端に96°あまりの角度で接しており、奥壁に接した部分が一番高く、前方に行くにしたがって下がっている三角形の正面形を呈している。この壁には全面にわたってマサカリでキリヌキ溝を掘る時に残った筋状の痕跡が残っている。下から70cmあまりのところには、イシアゲを行なって石を切り離した時にできる突起部分をノミ等で剥った痕跡と思われるものが横方向に存在する。その他の筋状の痕跡は、下方部が規則的に「ノ」の字形ないし羽状についているのに対し、上方は不規則な「ノ」の字形を呈しており、線の太さもやや小さい。

奥壁の前面には40cm~100cmの高低差のある平坦地が四ヶ所存在する。奥壁北側の手前にある平坦地には石垣が「L」字形に残っている。石垣はコーナー付近と南側が崩壊しているが、東側は、高さ60cmあまりで残りがよく、20cm大の石を二段ないし四段に積み上げている。石垣の右は、この石切場で採石した石を用いているため石の表面にはマサカリの痕跡の付いているものがある。東側石垣の前面にある平坦地には、炉に使用したと思われる石組があり、鉄製の鎌、鍬先、櫛等を検出した。

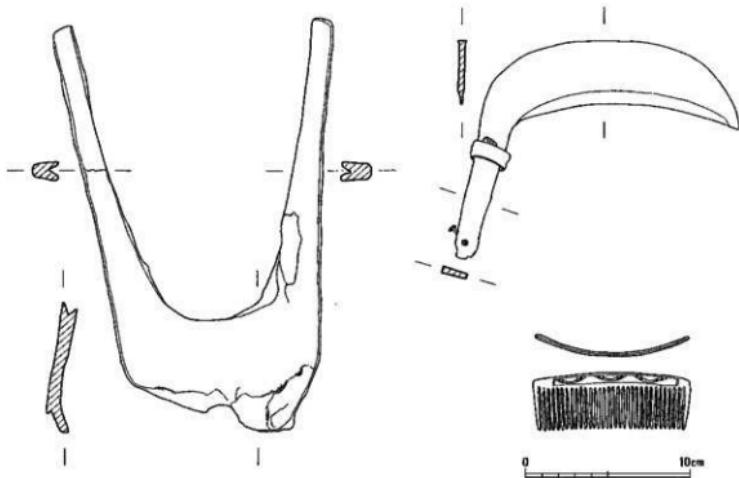
鉄製の鎌は刃の長さ9.5cm、刃部の幅2.7cm、柄の長さ6.1cmを計る両刃の厚鎌で、柄には口金と径0.2cmの目釘穴がある。この鎌は大量生産されたものではなく、鍛を打ち出して製作されたものである。鍬先は、刃先が欠けているが、現存長さ25.2cm、耳の長さ18.2cm、耳端の幅15cmを計る。耳は先に向かってやや外側に開き、内側の風呂台に接する部分には、深さ0.5cmのV字の溝がある。この鍬先は明治時代まで使用されていたもので、風呂鍬に伴うものと思われるが、鎌の可能性もある。櫛はプラスチック系の樹脂で作られた長さ8.8cm、幅3.4cmを計る横櫛で、櫛目やや粗く、櫛の上部には唐草風の装飾を施している。

勝負廻Ⅱ遺跡の採石跡は、奥壁に沿った横方向は自然節理面を利用し、奥行方向のみにキリヌキ溝を入れて採石しているものである。操業時期については、ノミ跡の痕跡からマサカリ道具の分類化が

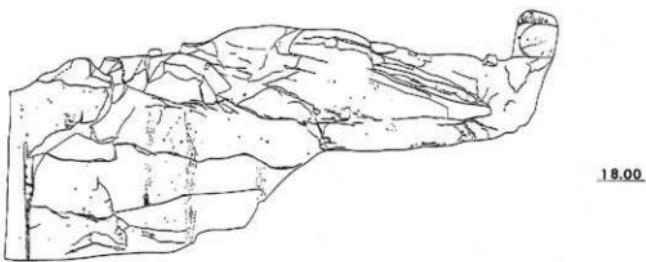
進んでいない段階のもので、奥壁前面の平坦地に生えていた杉の年輪や操業後納屋として利用されたところから出土した鉢先の年代等から考えて100年以上前に操業していたものと考えられる。



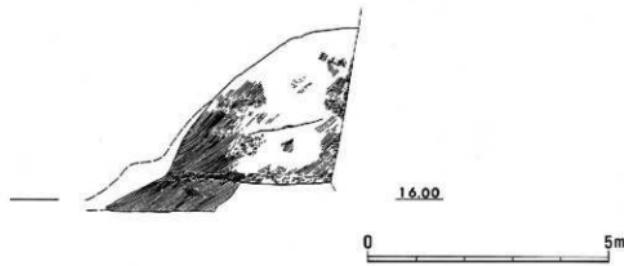
第14図 勝負廻Ⅱ遺跡地形測量図 (S=1/500)



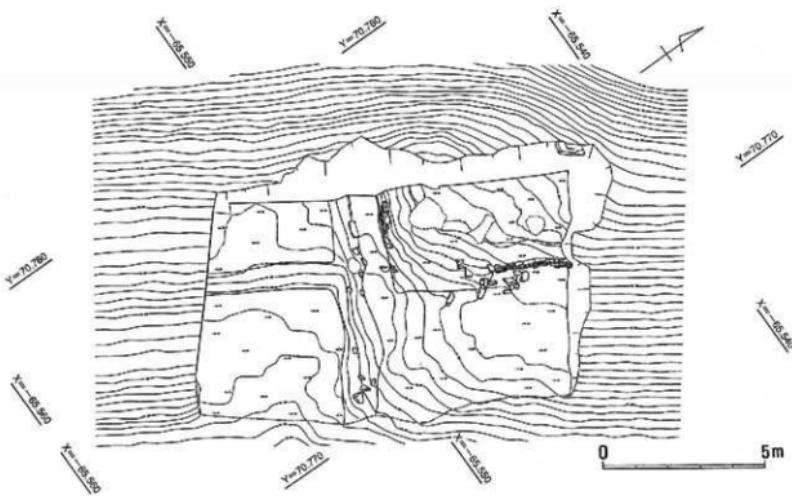
第15図 勝負廻Ⅱ遺跡出土遺物実測図 (S=1/3)



第16図 奥壁実測図 (S=1/100)



第17図 側壁実測図 (S=1/100)



第18図 平面図 (S=1/150)



写真12 勝負廻Ⅱ遺跡全景



写真13 勝負廻Ⅱ遺跡石垣



写真14 勝負廻Ⅱ遺跡側壁

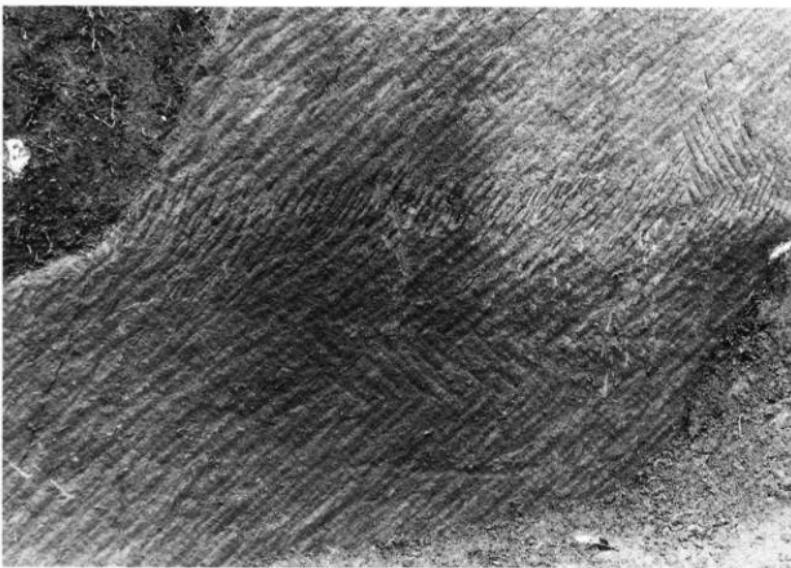


写真15 勝負廻Ⅱ遺跡側壁工具痕



写真16 勝負廻Ⅱ遺跡奥壁

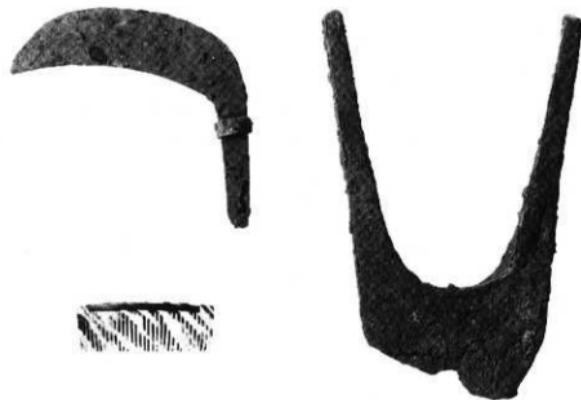


写真17 勝負廻Ⅱ遺跡出土遺物

4 節 イヤ谷遺跡

穴道町東米待大字1883番地他に所在する。ここは、来待川と弘長寺の谷との間に広がっている低丘陵地の一角にあたり、尾根を挟んだ東西の斜面に採石跡が数ヶ所存在する。東側には三ヶ所があるが、最も北よりにある規模の比較的大きいものを調査対象とした。しかし落石の危険性が極めて高いため、調査は現状の写真撮影と空中測量に留めた。西側は残りが比較的良好な一ヶ所について床面まで掘り下げる写真撮影と実測図作成を行った。

イヤ谷東区

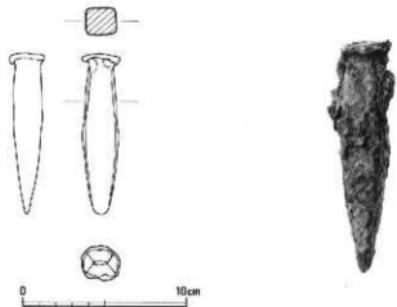
調査対象とした採石跡は、奥行10m、奥壁11m以上、高さ7.8mを計る「L」字形を呈しているもので、二つの壁面は約120°の角度で接している。側壁は自然剥離面が残っているのみで、しかも上半部が崩壊しているため実測図の作成はとりやめた。奥壁には壁に沿ってキリヌキ溝を掘った際についたマサカリの痕跡が全面に残っている。キリヌキ溝の一回あたりの深さは0.7m～1.3mで6回～7回にわたって石を切り出していたものと考えられる。奥行方向のキリヌキ溝は奥壁最上部に痕跡が一部残存しているが、側壁にマサカリの痕跡がないことから、この採石跡は奥壁に沿った方向にのみキリヌキ溝を入れ、イシアゲを行って石を切り離していたものと思われる。マサカリの痕跡は羽状のものと斜めのものがあり、全体的にやや不規則でマサカリの道具が細分化していない段階のものと推測される。なお、奥壁には水切のための溝が掘られたり、北側は火薬による採石が行われてマサカリの痕跡が消滅している。

イヤ谷西区

尾根から少し下がった所に存在している採石跡。奥壁は長さ8.8m、高さ8.5mを計り、左側壁とは純角で、また、右側壁とは鋭角で接している。床面にはキリヌキ溝が残っており、左右に一段高いテラスが存在する。中央の低い床面は最終段階の採石跡にあたり、縦230cm、横200～430cm、厚み110cmを計る長方体の石を切り出している。これに伴うキリヌキ溝は、奥行方向のものが床面に現存しているが、横方向のものは左右にあるテラスの断面に痕跡が残っているのみである。溝は幅5cm前後で、溝を施したところの床面は畝状にすこし高まっており、手前から矢を入れてイシアゲを行っていたものと思われる。また、床面の前方には通路と思われる階段が掘られている。

奥壁は床面から5mあまりの範囲にマサカリの痕跡が顕著に残っている。イシアゲを行った面は幅の短いノミの痕跡が横方向に伸びているところとマサカリの痕跡の方向が変わっている変換点にあたっているところがあり、イシアゲは5段にわたって行っている。また壁に沿ったキリヌキ溝はマサカリの痕跡が斜めにきれいに残っており、一つの段は同じ方向に痕跡がついているところが多い。ただ、上から2段と4段目のところには奥行方向のキリヌキ溝の痕跡が残っており、この部分では方向が異なる。採石した石の厚みは60cm～120cm、長さは210cm～430cmを計る。

右側壁は、壁の表面が剥離しているところが多く、部分的にマサカリの痕跡が残っているが、本来は全面に施していたものと考えられる。残存しているマサカリの痕跡は右下がりの斜めがほとんどで、奥壁に接した付近は横方向のものが見られる。左側壁は上半部に自然剥離面があり、下半部にマサカリの痕跡が残っている。

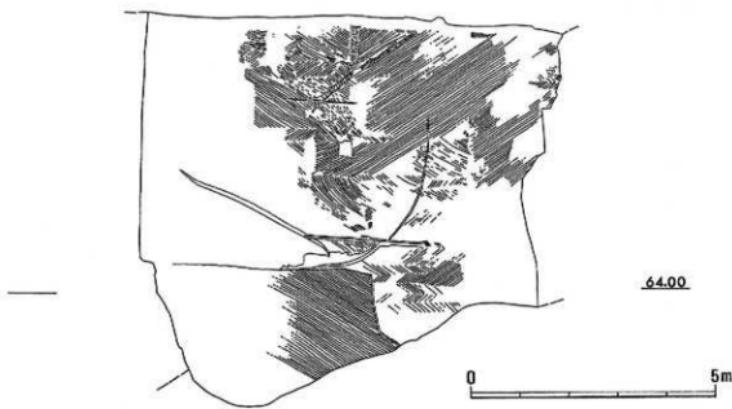


第19図 イヤ谷出土遺物実測図 (S=1/3) 写真18 イヤ谷遺跡出土遺物

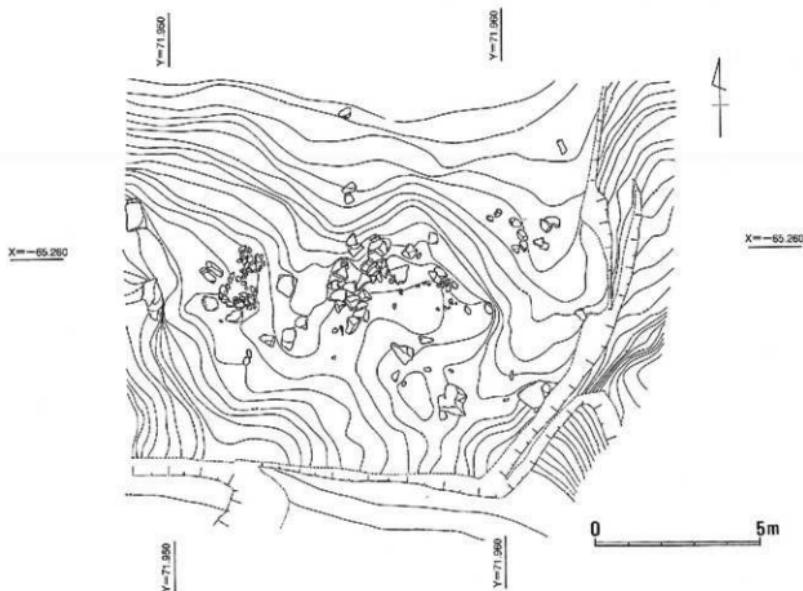
この石切場から全長10cm、最大幅2.2cm、最大厚1.7cmを計る小矢が1点出土した。刃先は丸みを持ち、断面は尖っている。玄能で叩く頭は径2.0cmの円形を呈しており、身の上方部はややくびれて幅が細く、身と刃のさかいあたりが一番幅が広くなっている。身の部分の断面は正方形である。



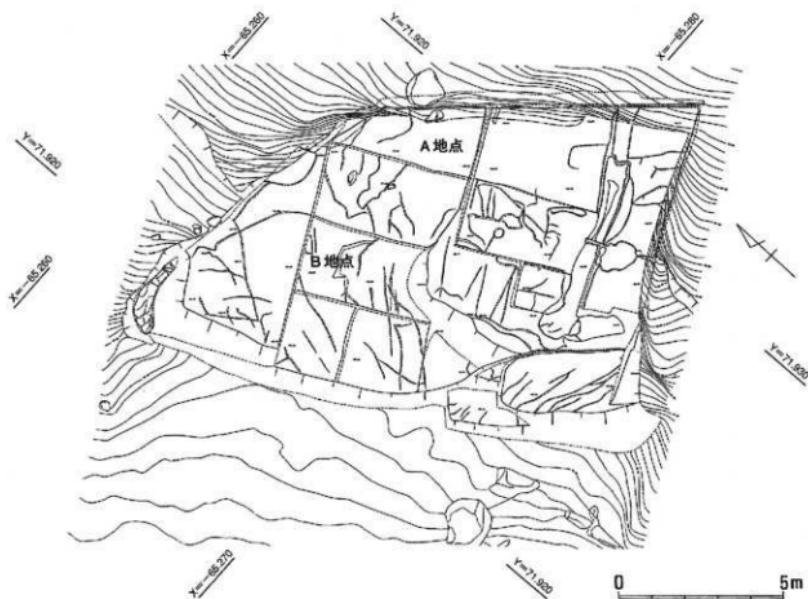
第20図 イヤ谷遺跡地形測量図 (S=1/500)



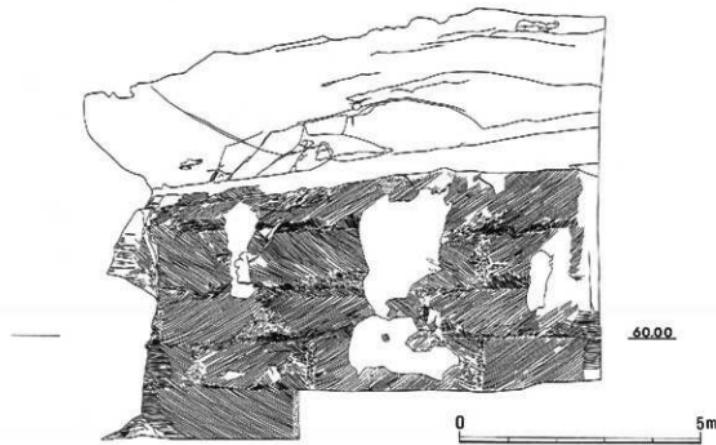
第21図 東区奥壁実測図 ($S=1/100$)



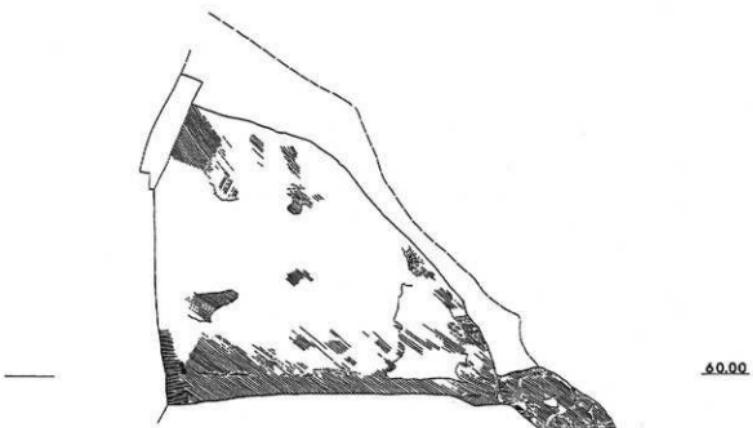
第22図 東区平面図 ($S=1/150$)



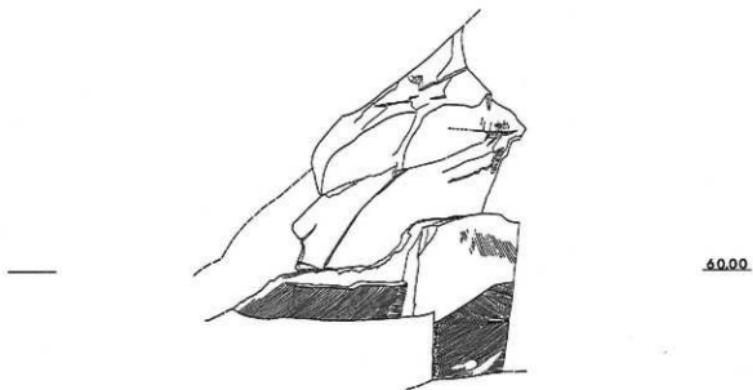
第23図 西区平面図 ($S=1/150$)



第24図 西区奥壁実測図 ($S=1/100$)



第25図 西区側壁実測図（南側）（S=1/100）



第26図 西区側壁実測図（北側）（S=1/100）



第27図 西区 A 地点実測図（S=1/100）

第28図 西区 B 地点実測図





写真19 イヤ谷遺跡東区全景



写真20 イヤ谷遺跡東区採石跡



写真21 イヤ谷遺跡西区採石跡

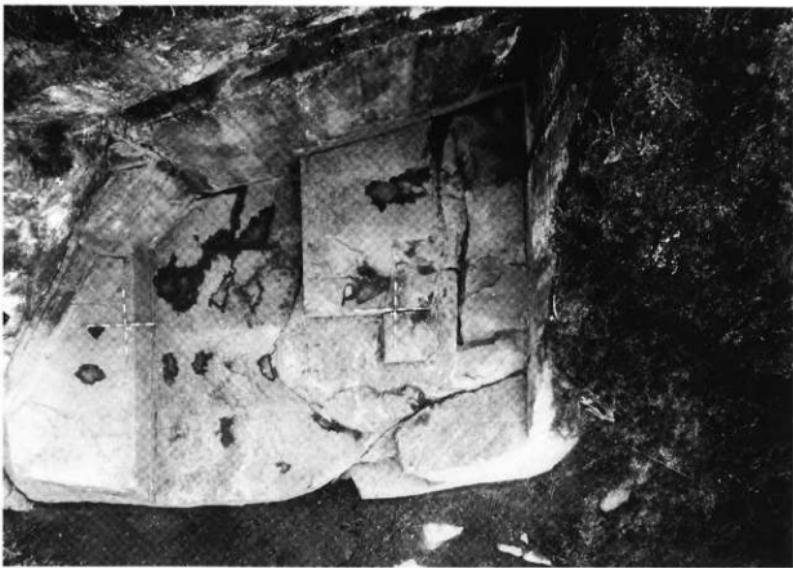


写真22 イヤ谷遺跡西区採石跡 上方から

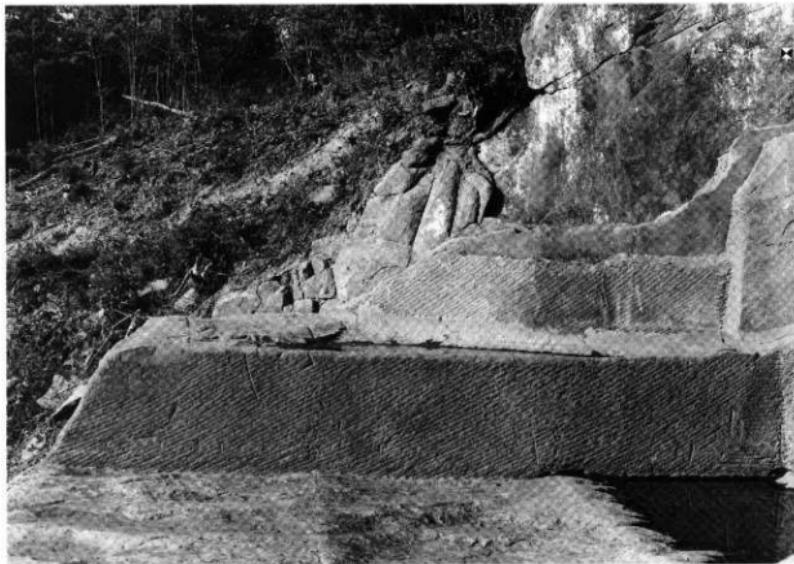


写真23 イヤ谷遺跡西区側壁（西側）



写真24 イヤ谷遺跡西区側壁（東側）

5節 大畠遺跡

イヤ谷西側の丘陵斜面に存在する石切場で、所在地は宍道町大字東来待1799番地他である。この石切場は100m×50mの範囲内に10数ヶ所の採石跡が残る大規模なものであるが、昭和30年代に発破による採石が行われ、人力による採石跡が消滅している所が多い。調査は比較的残りが良く安全な二ヶ所を調査対象とした。

第Ⅰ採石跡

大畠石切場のほぼ中央に位置する比較的残りの良い採石跡で、長さ12m、幅6.9m、高さ9mを計り、平面形は「コ」の字形を呈する。この採石跡は丘陵斜面中ほどに存在し、東側の下方には第Ⅱ採石跡がある。床面にはイシアゲを行った痕跡が明瞭に残っている。最終段階の採石は縦3列、横4～8列にわたって切り出しており、その大きさは小さいもので160cm×140cm、大きいもので220cm×210cmを計り、厚みは50cm～80cmである。イシアゲの痕跡は「ロ」の字形を呈し、横端の部分は鉤状に若干盛り上がり、縦端は溝によって区切られ、中央部は凹んでいる。石の切り出し方法は、まず縦に4本のキリヌキ溝をいれ、採取したい石の大きさに横方向のキリヌキ溝を掘り、手前から矢を入れてイシアゲを行っている。石の切り出しは手前から奥壁に向かって企画的に行っている。

奥壁にはマサカリの斜めの痕跡とイシアゲを行った横方向の痕跡がきれいに残っており、11段にわざって厚み50cm～80cmの石を切り出していることが分かる。マサカリの痕跡は右下がりの斜線の所が多いが、右側で左下がりが見られ、側壁に隣接しているところは横方向となっている。また、床面に残っていた縦方向のキリヌキ溝の内、右側のものは奥壁にマサカリの刃の先端が壁に当たった点状の痕跡が付いている。右端中段から左斜め上の方向に階段状の小さな平坦面を持つ段差があり、中段から下の部分には3本の節理の線がほぼ水平に伸びている。

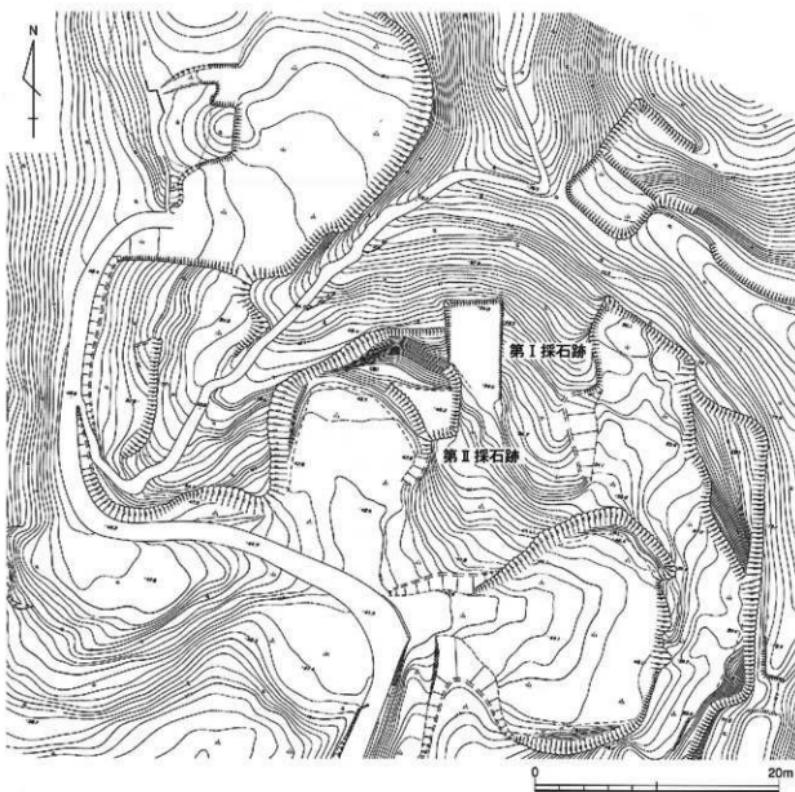
右側壁は直角三角形を呈し、全面に斜め（右下がり）方向のマサカリの痕跡が残っており、側壁に沿った縦方向のキリヌキ溝は奥壁から手前方向に掘られていることが分かる。奥壁で見られた3本の節理の線は奥壁に向かって下がって伸びている。左側壁は発破で採石した際に前側が消滅して長さが短くなっているが、右側壁と同様なマサカリの痕跡が残っている。

第Ⅱ採石跡

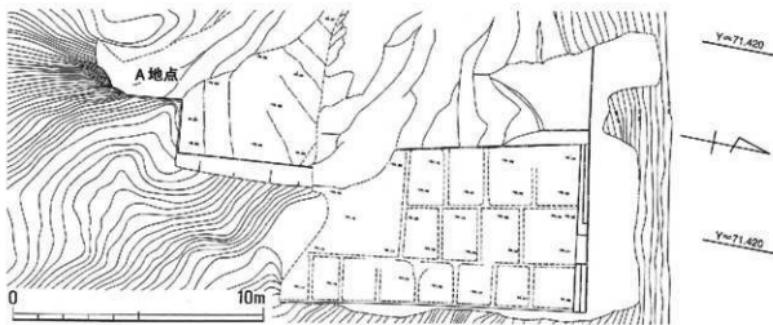
第Ⅰ採石跡の西側斜面にある採石跡で、前側、左側壁が発破による採石で消滅しているが、現存している奥行きは2.2m、幅5.8mを計る小規模なもので、本来は「コ」の字形を呈した整美なものではなかったと思われる。奥壁は高さ2m～4mを計り、全面にマサカリの痕跡が残っている。基本的には左から右方向に横方向のキリヌキ溝を掘り、4段にわたって石を切り出していたものと考えられる。側壁にもきれいなマサカリの痕跡が残っている。

その他の採石跡

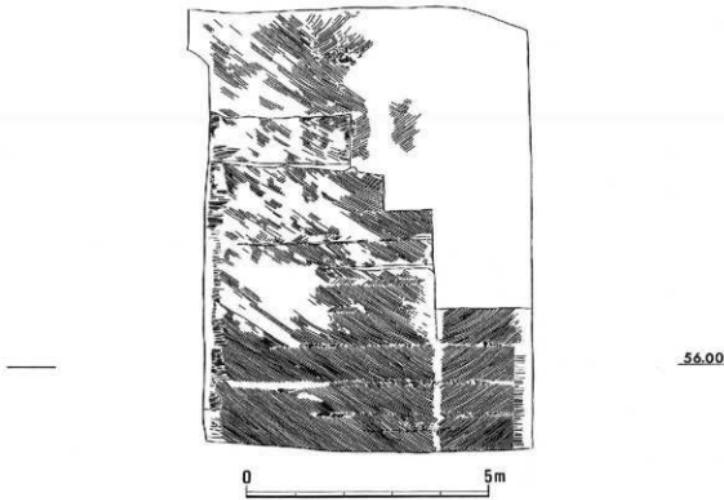
第Ⅰ採石跡の東側上方には人力で石を切り出している採石跡が1ヶ所残っているが落石の危険性が極めて高いため調査から除外した。また、この右切場の東側及び第Ⅱ採石跡の西側部分は大規模な発破による採石が昭和30年代に行われている。



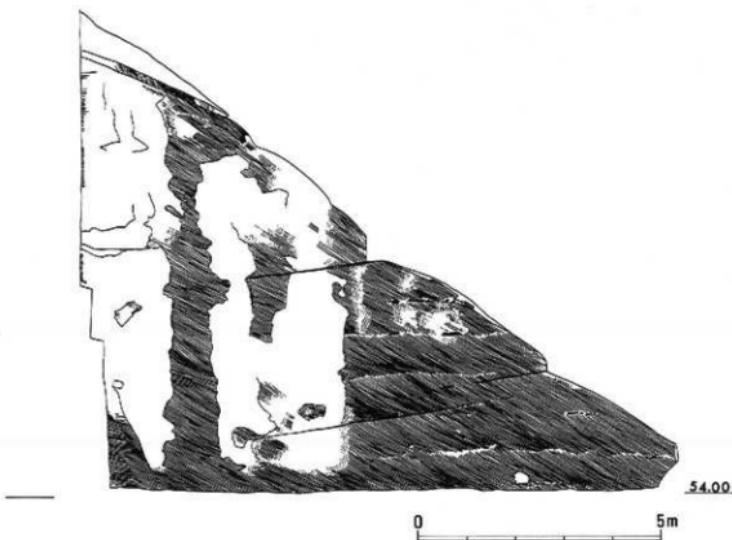
第29図 大畠遺跡地形測量図 (S=1/600)



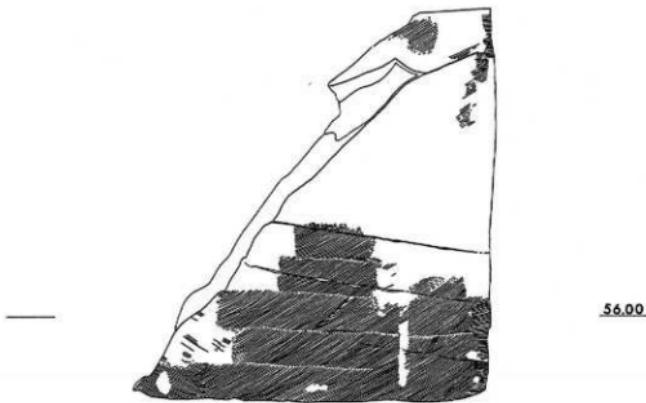
第30図 第I・第II採石跡平面図 (S=1/200)



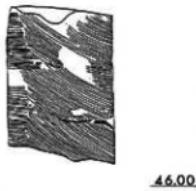
第31図 第Ⅰ採石跡奥壁実測図 (S=1/100)



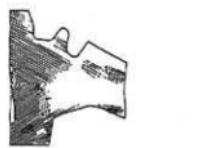
第32図 第Ⅰ採石跡側壁実測図（東側）(S=1/100)



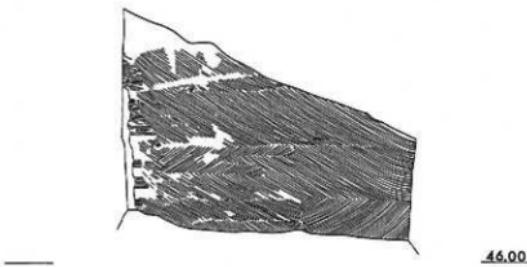
第33図 第Ⅰ 採石跡側壁実測図（西側）(S=1/100)



第34図 第Ⅱ 採石跡側壁実測図（南側）(S=1/100)



第35図 第Ⅱ 採石跡 A 地点実測図 (S=1/100)



第36図 第Ⅱ 採石跡奥壁実測図 (S=1/100)

0 5m



写真25 大烟遺跡第Ⅰ探石跡



写真26 大烟遺跡第Ⅰ探石跡側壁（東側）



写真27 大烟遺跡第Ⅰ探石跡床面



写真28 大烟遺跡第Ⅰ探石跡（西側）

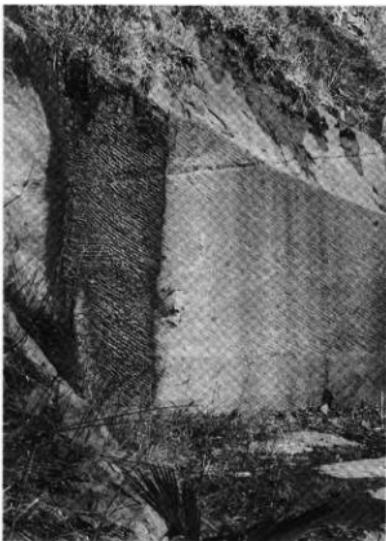


写真29 大烟遺跡第Ⅱ探石跡

6 節 長廻遺跡

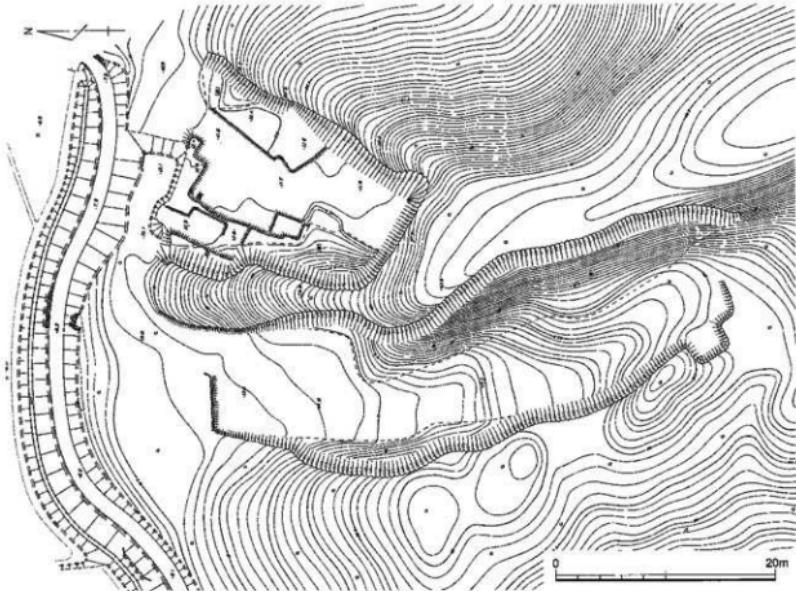
米待川の西側に広がっている低丘陵地の一角に存在している大規模な石切場で、尖道町西来待2201番地他に所在する。ここには採石跡が二ヶ所あるが西側に存在しているものは重機が入りにくく、危険性も高いことから調査対象から除外した。調査対象とした採石跡は高さが22mを計る壮大なもので、側壁の大部分は昭和30年代以降に発破で採石した際に崩され、床面近くは最近まで機械による採石が行われていたところである。調査は落石の危険があるため、重機で床面に散乱している石を取り除き、比較的安全な個所を人力で清掃し、写真撮影と実測図の作成を行った。

この採石跡は平面形はやや前開きの「コ」の字形を呈し、右側壁が鍵形に広がっている。床は長さ30m、幅7.8m～15mをはかる広大な面積を持っているが、そのほとんどが機械で採石した痕跡が残っているところである。機械では幅0.5m、長さ4.5m、厚み1.0mあまりの板状の石を切り出しており、奥壁と左側壁の下部では二ヶ所でトンネル状に石を採石している。奥のものは奥壁と側壁にまたがる逆L字形を呈し、また、手前のものは間口11.0mの方形に切り抜いている。機械での採石はチェンソー状のもので上部の縦横を切ってゲンノウで叩いて床から切り離しているため、床面にはチェンソーで切った筋状の跡と石が剥離した面の痕跡が残っている。奥壁の右側から手前方向にかけて長さ10m、幅2.3～3.0mの落ち込みがあるが、これは最近土地所有者が池にするために掘りこんだものである。

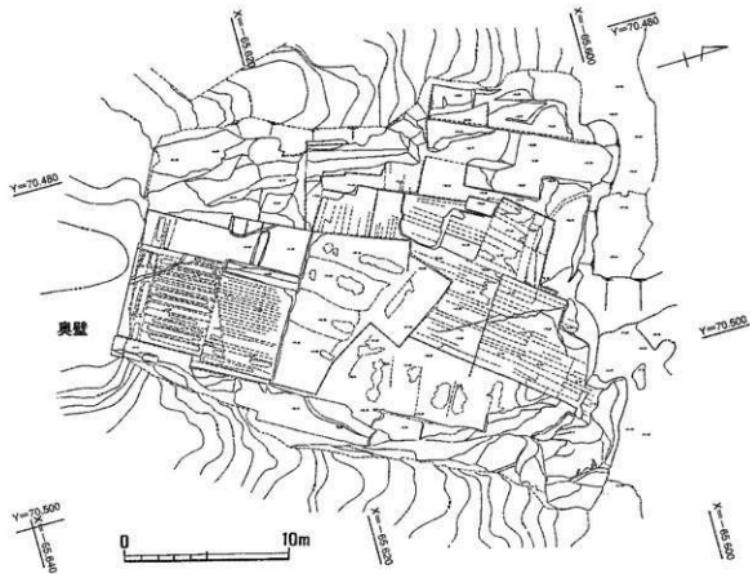
奥壁は幅9.2m、高さ22.5mを計る壮大なもので、壁はほぼ垂直に切り立っている。床から6.7mあまりまでは、機械による切り出しの痕跡が残っている。切り出した石の厚みは0.6～1.2mを計り5段～7段にわって採石している。上方部はマサカリでクリヌキ溝を掘ってイシアゲを行った痕跡が残存している。奥壁に沿ったクリヌキ溝を掘る際に付いたマサカリの痕跡は下方部では斜め方向の規則的なものであるが、上方部は不規則な痕跡となっており、時代が新しくなるにしたがって石の切り出し技術が発達し規則的に採石していった過程を良く示している。石の採石は15段以上にわたって行われており、かなりの年数にわって操業していたものと考えられ、切り出した石の厚みは0.5m～1.3mあまりを計る。また、壁の上方部は水切りの溝が「く」の字形に掘られており、表面が剥離しているところが多い。

右側壁は長さ26m、高さ21.5mあまりを計るが、そのほとんどが発破と機械による採石が行われていたところで、前側の上方部に手掘りの切り出し痕が残っている。この痕跡はマサカリによって付けられたもので、規則的にクリヌキ溝を掘ったものである。この人力による採石の後、発破、機械による採石が行われたため、マサカリの痕跡の大半が消滅している。左側壁も長さ31m、高さ21mあまりを計る規模の大きなものであるが、奥壁に近いところにわずかにマサカリの痕跡が残っているだけで、そのほとんどが発破と機械による採石で消滅している。

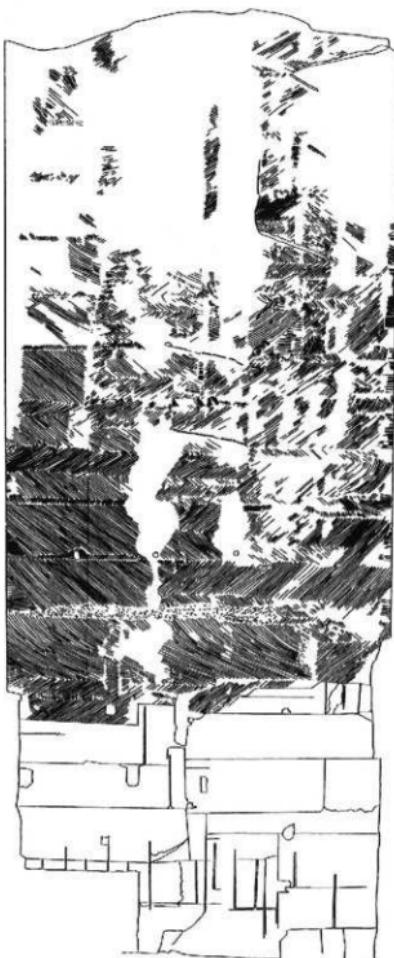
床面近くから矢が二本出土している。第42図1の矢は長さ10.0cm、刃の幅6.0cmの撥形を呈したコヤである。頭部は径4.2cmを計る円形をなし、首の部分は最も幅が狭く3.0cmあまりで断面は方形である。首から刃にかけての断面は楔形に尖っており、刃部の先端は平らである。第42図2の矢は長さ23.0cm、刃の幅2.7cmを計るナガヤで、頭部は径3.5cmの円形をなし、刃の先端は平らである。断面は頭部近くは円形で、その下方部は長方形を呈し、刃の先端は0.6cmあまりの厚みを持っている。



第37図 長堀遺跡地形測量図 ($S=1/600$)



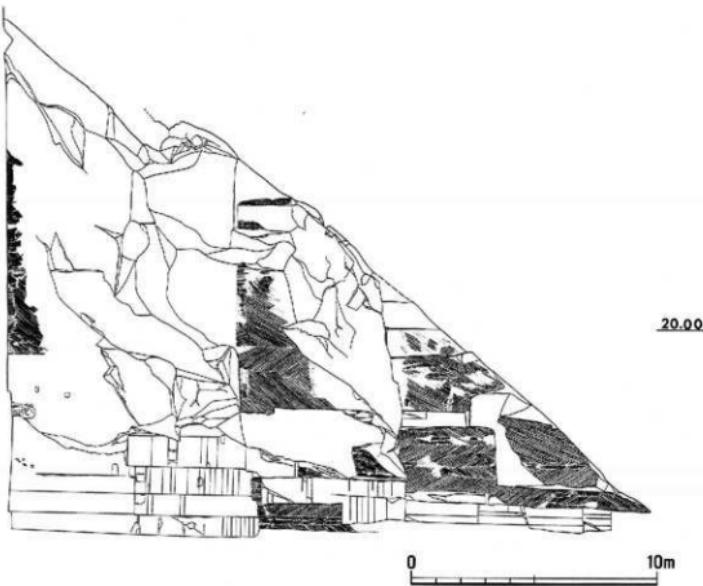
第38図 平面図 ($S=1/300$)



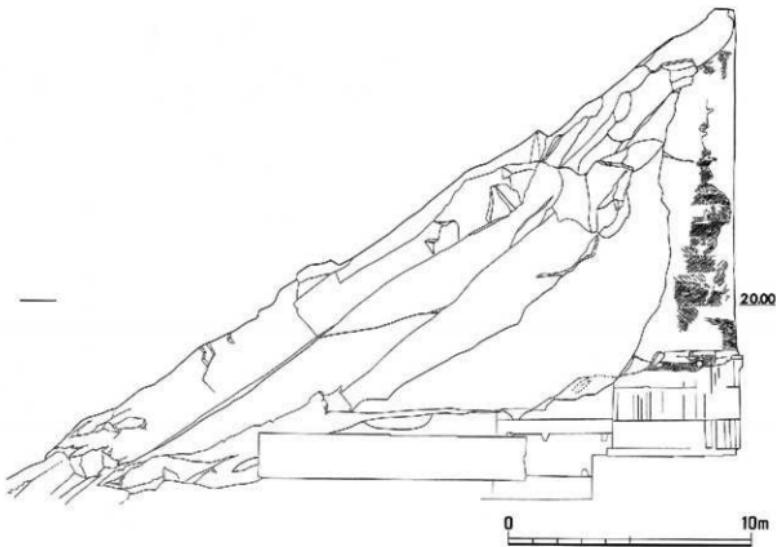
15.00

0 5m

第39図 奥壁実測図 (S=1/100)



第40図 側壁実測図（西側）(S=1/200)



第41図 側壁実測図（東側）(S=1/200)



写真30 長庭遺跡側壁（西側）



写真31 長庭遺跡機械採石痕